

# 彦六ダブ

ひころく



登場人物

ナレーター

彦六

娘

母親

弟

お坊さん

村人



1





彦  
六

「あーせっかく買ったばかりなのに」  
川に落ちたナタが惜しくて、彦六は冷たい水の中に飛びこみました。いちばん深いところまでもぐって探していると、川の底にとてもきれいな女の人<sup>ふか</sup>が立っているではありませんか。

暗い水の底がそこだけ明るくなって、もえぎ色の絹の着物を着て、髪には、七色に光るかんざしをつけていました。その女の人は彦六の顔を見てにつこ



彦  
六

昔、下今泉の鶴松に彦六という働き者で親孝行の若者が住んでいました。年の暮れのある日、彦六は正月用の門松を切りに、鳩川沿いの松林へでかけました。

その日は、買ったばかりの新しいナタを持って行き、手ごろで形のいい松を探して歩きました。ふと、ふりかえると、さつき見たはずのあたりにすばらしく形のいい松が立っているではありませんか。

「おかしいな、さつき見たのに・・・」  
と思いつながらその松を切ろうとナタをふるいました。ところが、カチーンと金物をたたくような音がして、ナタははねかえされ、川の中へ飛んでいてしまいました。



彦  
六

「家では心配しんぱいしているだろうな。今までだまって家を空けたことはないからな・・・」

あまりにも居心地いこころがいいので、彦六は三日三晩みっかみばんそこでお世話せわになってしまいましたが、

娘の家へ着くとびっくり。今まで見たこともないような立派りっぱな御殿ごてんです。娘が手をたたくと色々なごちそうを運はこんできました。特にめずらしかったのは、「不老長寿ふろうちようじゆの酒さけ」でした。

彦  
六

彦六は夢ゆめを見ているような気持ちで、水の中を歩いて行きました。「水の中なのに地上ちじようにいるのと同じように歩けるし、話すこともできる」

と彦六を自分の家へ案内あんないしました。

娘  
彦  
六

「ナタが川へ落ちおてしまったのです」

「ああ、それならうちの女中じよちゆうが拾ひろってきました。うちへいらつしやい」

とたずねました。「どうしてここへいらつしやったの？」

娘

り笑い、



娘

と、そろそろ家のことが心配になりました。

娘はすぐ彦六の気持ちをさっして

「あなたはお家が恋しくなったのでしよう。無理におひきとめはしません。記念に私が大切にしている手文箱をあなたにさしあげます。この箱には“すずめの空音”という宝の玉が入っています。私に会いたくなったら、この玉を振ってください。また、この玉を通してすずめと話すこともできます」と、きれいな箱を彦六にわたしました。

「ごちそうになったうえ、おみやげまでいただきありがとうございます」

「ひとつだけ約束してください。宝の玉は、誰にも見せないでください」

「わかりました。約束は守ります」

彦六

娘

彦六

あれから、地上ではすでに三年の歳月がたっていました。彦六の家では、門松を切りに行ったきりなかなか帰ってこないのです、ダブへ落ちてしまったものと思い、悲しみに沈んでいました。今日は、お坊さんに拝んでもらっていました。彦六が家の中へ入って行くと、



彦六

「だれの葬式だ」

坊さん

「わあー ゆ、ゆうれいだー」

母親

「ほんとに彦六か？今までどこへ行ってたんだ」

彦六

「うーん、ナタをさがしにちよつとそこまで」

弟

「あんちゃんがいなくなってから、ずーつと捜していたんだよ」

母親

「でも、無事に帰って来てくれて、本当に良かった」

彦六

「みんな、心配かけたなー」

坊さん

「あーびつくりした、人騒がせな男だ。しかし、こんなめでたい事はない」

弟

「あんちゃん、三年もどこへ行ってたんだ」

彦六は、三日しかたつてないと思っていたのに三年も過ぎていたのにおどろきました。そして、彦六の話を聞いているうちに、おみやげにもらつてきた手文箱の中身を知りたくなりました。

「あんちゃん、中をあけてみせてくれよ」

「娘さんと約束したから、誰にも見せられねえ」

「きれいな箱だね。何が入っているのか見たいね」

「あんちゃん、いいだろう、一回ぐらい見せてくれ」

しかし、家のものがあまりにもしつこく言うので、とうとう箱を開けてしまいました。すると空は急に黒い雲におおわれ、ものすごく大きな雷が鳴り出し、彦六も箱もいっぺんに消えてなくなりました。

その夜、みんなは同じ夢をみました。それは天女のような美しい女のひとに彦六が手を引かれて、空高く雲のかなたへ飛び去って行く夢でした。